

# 多次元の確率分布と独立性

樋口さぶろお

龍谷大学工学部数理情報学科

確率統計☆演習 I L06(2017-11-01 Wed)

最終更新: Time-stamp: "2017-10-31 Tue 07:53 JST hig"

## 今日の目標

- 同時分布から周辺分布, 母期待値, 母共分散, 母相関係数が計算できる 西川確率統計 §2.3
- 確率変数の独立性を判定し利用できる

西川確率統計 §1.5.4



<http://hig3.net>

## L05-Q1

Quiz 解答: 離散的な確率変数の母平均・母分散・母標準偏差

① 期待値  $E[e^X] = \frac{4}{12} \cdot e^{-1} + \frac{5}{12} \cdot e^0 + \frac{3}{12} \cdot e^2.$

② 母平均値  $E[X] = \frac{4}{12} \cdot (-1) + \frac{5}{12} \cdot 0 + \frac{3}{12} \cdot 2 = \frac{1}{6} (= \mu).$

③ 母分散

$$V[X] = E[(X - \mu)^2] = \frac{4}{12} \cdot (-1 - \frac{1}{6})^2 + \frac{5}{12} \cdot (0 - \frac{1}{6})^2 + \frac{3}{12} (2 - \frac{1}{6})^2 = \frac{47}{36}.$$

④ 母標準偏差  $\sqrt{V[X]} = \sqrt{\frac{47}{36}}.$

⑤ 確率  $E[\mathbf{1}_{[a(X)]}(X)] = \frac{4}{12} \cdot 1 + \frac{5}{12} \cdot 1 + \frac{3}{12} \cdot 0 = \frac{9}{12} = \frac{3}{4}.$

## L05-Q2

Quiz 解答: 確率変数の変換

$$E[X^2] = V[X] + E[X]^2 = 13.$$

①  $E[-X^2 + 2X - 3] = -E[X^2] + 2E[X] - 3E[1] = -13 + 2 \cdot 2 - 3 \cdot 1 = -12.$

②  $V[-2X - 3] = V[-2X] = (-2)^2 V[X] = 36.$

## ここまで来たよ

- 1 離散型確率変数
- 2 多次元の確率分布と独立性
  - 2次元の確率分布
  - 母共分散
  - 独立性

## 2つの離散型確率変数の同時分布 高校 数学 B

例 6枚のカードから無作為に1枚引く. ♡7 ♡8 ♡9 ◇8 ♠9 ♣9

2つの離散型確率変数の同時分布

$X =$  数,  $Y = 0$ (赤札),  $1$ (黒札) とすると  $(x, y)$  を得る確率は2変数の確率関数で書ける. 同時分布, 結合分布, **joint distribution** という.

$$f_{XY}(x, y) = \begin{cases} \frac{1}{3} & ((x, y) = (8, 0)) \\ \frac{1}{6} & ((x, y) = (9, 0)) \\ \frac{1}{3} & ((x, y) = (9, 1)) \\ \frac{1}{6} & ((x, y) = (7, 0)) \\ 0 & \text{(他)} \end{cases}$$

表で書いた方がまし. ここでは, 「他」は省略.

$y \backslash x$	7	8	9	計
0	$\frac{1}{6}$	$\frac{1}{3}$	$\frac{1}{6}$	
1	0	0	$\frac{1}{3}$	
計				

## 周辺分布

### 確率変数の周辺分布

同時分布  $f_{XY}(x, y)$  に対して,  
 $X$  の周辺分布  $f_X(x)$ ,  $Y$  の周辺分布  $f_Y(y)$  は,

$$\text{離散型 } f_X(x) = \sum_y f_{XY}(x, y), \quad f_Y(y) = \sum_x f_{XY}(x, y),$$

要するに

## 同時分布が与えられたときの母期待値 高校 数学 B

### 同時分布が与えられたときの母期待値

離散型 
$$E[\phi(X, Y)] = \sum_{x=-\infty}^{+\infty} \sum_{y=-\infty}^{+\infty} f_{XY}(x, y) \cdot \phi(x, y)$$

## L06-Q1

## Quiz(多次元の確率変数の期待値)

2変数  $X, Y$  の離散型確率分布を考える. 同時分布  $f_{XY}(x, y)$  が下の表で与えられる.

$y \backslash x$	1	2	3
0	0	2/12	1/12
2	4/12	0	5/12

- ① 母期待値  $E[X + 2Y]$  を求めよう.
- ② 母期待値  $E[\mathbf{1}_{[Y \geq 1]}(X, Y)]$  を求めよう.
- ③ 周辺分布  $f_X(x), f_Y(y)$  を求めよう.

2次元の確率分布の母期待値の性質 高校 数学 B 西川確率統計定理 2.7(p.48)

$$\begin{aligned} E[\phi_1(X, Y) + \phi_2(X, Y)] &= E[\phi_1(X, Y)] + E[\phi_2(X, Y)] \\ \text{特に } E[X + Y] &= E[X] + E[Y] \end{aligned}$$

なぜなら,

$$\begin{aligned} E[X + Y] &= \sum_x \sum_y f_{XY}(x, y) \cdot (x + y) \\ &= \sum_x \sum_y f_{XY}(x, y) \cdot x + \sum_x \sum_y f_{XY}(x, y) \cdot y \\ &= E[X] + E[Y]. \end{aligned}$$

## $X$ だけ, $Y$ だけの関数の母期待値

$x$  だけ,  $y$  だけの関数の母期待値は,

下の左辺=  で計算しても

下の右辺=  で計算しても  
同じ.

$$E[\phi(X)] = \sum_x \sum_y f_{XY}(x, y) \cdot \phi(x) = \sum_x \phi(x) \sum_y f_{XY}(x, y) = \sum_x \phi(x) \cdot f_X(x)$$

$$E[\phi(Y)] = \sum_y \sum_x f_{XY}(x, y) \cdot \phi(y) = \sum_y \phi(y) \sum_x f_{XY}(x, y) = \sum_y \phi(y) \cdot f_Y(y)$$

## ここまで来たよ

- 1 離散型確率変数
- 2 多次元の確率分布と独立性
  - 2次元の確率分布
  - 母共分散
  - 独立性

## 母共分散 高校 数学 B 西川確率統計定義 2.9(p.57)

### 母共分散 covariance

$X, Y$  が確率変数で,  $\mu_X = E[X], \mu_Y = E[Y]$  であるとき, **母共分散**  $\text{Cov}[X, Y]$  (西川確率統計  $C(X, Y)$ ) を次で定義.

$$\begin{aligned}\text{Cov}[X, Y] &= E[(X - \mu_X)(Y - \mu_Y)] \\ &= \text{西川確率統計問題 2.10(p.58)} \cdots = E[XY] - E[X] \times E[Y].\end{aligned}$$

### 母相関係数 correlation

$X, Y$  が確率変数であるとき, **母相関係数** を次で定義.

$$\rho[X, Y] = \frac{\text{Cov}[X, Y]}{\sqrt{V[X]}\sqrt{V[Y]}}$$

$-1 \leq \rho[X, Y] \leq 1$  が成立.

## L06-Q2

さっきの問で母共分散は?

## L06-Q3

## Quiz(独立と限らない確率変数の母期待値)

確率変数  $X, Y$  を考える.

$E[X] = 2, E[Y] = 3, V[X] = 5, V[Y] = 11, \text{Cov}[X, Y] = 7$  である.

- 1  $E[-2X + 3Y]$  を求めよう.
- 2  $V[-2X + 3Y]$  を求めよう.

## ここまで来たよ

- 1 離散型確率変数
- 2 多次元の確率分布と独立性
  - 2次元の確率分布
  - 母共分散
  - 独立性

## 独立性 高校 数学 B 西川確率統計 §1.5.4

### 独立性

確率変数  $X, Y$  が同時分布  $f_{XY}(x, y)$  を持つとする。  
 $X, Y$  が独立とは、

$$f_{XY}(x, y) = f_X(x) \times f_Y(y)$$

が成立することをいう (世の中には、同値な定義が多数)。

$X, Y$  が独立とは、 $X, Y$  が互いに

事象  $A, B$  が独立  $\Leftrightarrow P(A \text{ かつ } B) = P(A) \times P(B)$  西川確率統計 §1.5.3 の特別な場合。

### 独立性と母共分散 西川確率統計注意 2.10(p.57)

$X, Y$  が独立なとき、母共分散  $\text{Cov}[X, Y] = 0$ 。

すぐ後で証明。

母共分散  $\text{Cov}[X, Y] = 0$  は、 $X, Y$  が独立であるための   条件。

## L06-Q4

## Quiz(2つの離散型確率変数の母期待値・母平均値・母共分散・確率・独立性)

離散型確率変数  $X, Y$  の同時分布は次の表で与えられる.

$y \backslash x$	1	3
2	$1/7$	$2/7$
4	0	$4/7$

で与えられる.

- ①  $X, Y$  が独立かどうか判定しよう.
- ② 母分散  $V[X]$  を求めよう.
- ③ 母共分散  $\text{Cov}[X, Y]$  を求めよう.

## L06-Q5

## Quiz(離散型確率変数の独立性)

2次元の離散型確率変数  $(X, Y)$  を考える. 同時分布  $f_{XY}(x, y)$  は次の表で与えられる (現れない  $X, Y$  の確率は zero である).

$y \backslash x$	2	3
3	2/12	1/12
7	A	B

$X, Y$  が独立になるように, 実数  $A, B$  を定めよう.

$X, Y$  が独立のときだけに成立する性質 西川確率統計定理 2.13(p.57)

$$E[\phi_1(X) \times \phi_2(Y)] = E[\phi_1(X)] \times E[\phi_2(Y)]$$

$$\text{特に } E[XY] = E[X] \times E[Y] \quad \text{西川確率統計定理 2.9(p.49)}$$

$$\text{特に } \text{Cov}[X, Y] = (E[XY] - E[X] \times E[Y]) = 0$$

$$\text{Cov}=0 \text{ のときに } V[X + Y] = V[X] + V[Y] \quad \text{西川確率統計定理 4.2(p.85)}$$

$$\begin{aligned} E[XY] &= \sum_x \sum_y f_{XY}(x, y) \cdot x \cdot y \\ &= \sum_x \sum_y f_X(x) \times f_Y(y) \times x \times y \\ &= \sum_x f_X(x) \cdot x \times \sum_y f_Y(y) \cdot y = E[X] \times E[Y] \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} V[X + Y] &= E[(X + Y)^2] - E[X + Y]^2 \\ &= E[X^2] + 2E[XY] + E[Y^2] - (E[X]^2 + 2E[X]E[Y] + E[Y]^2) \\ &= V[X] + 2\text{Cov}[X, Y] + V[Y] \end{aligned}$$

## L06-Q6

## Quiz(独立な確率変数の母期待値)

独立な確率変数  $X, Y$  を考える.

$E[X] = 2, E[Y] = 3, V[X] = 5, V[Y] = 11$  である.

- 1  $E[(-2X + 3Y)(X + 5Y)]$  を求めよう.
- 2  $V[-2X + 3Y]$  を求めよう.

## L06-Q7

西川確率統計例題 2.3(p.50)

## L06-Q8

西川確率統計演習 2.4(p.59)

## L06-Q9

西川確率統計演習 2.5(p.59)

## 連絡

- 2017-11-22 水 1 プチテスト. 教室 1-609. 出題計画は別紙 (一部の (数学的) 問題の PC による回答あり. Excel の使い方の問題は出題しません).
- 2017-11-08 水 5 数理情報学科 3 年生向け特別研究 (卒業研究) 履修説明会=研究室配属.
- 2017-11-08 水 1 教室変更あるかも.
- 配布資料は 1-503 向かいの引出, <http://hig3.net> で再配布.
- 加減乗除と平方根 (ルート) の使える電卓持ってきてね. 関数電卓でなくてもいいです. 携帯電話の機能・アプリでもかまいません.
- 樋口オフィスアワー月 3.5(1-539) 金 4(1-502), Math ラウンジ月-木昼